の問題に

から挑んだ

炎対策が、なぜいまごろ全国的にクローズアップされているの？」そうした声が出ても当然なくらい、佐賀県とりわけ神埼町では、昭和六十二年から先駆的に肝炎対策にとりくみ、成果も出してきました。そのなかで保健婦として中心的な役割をになってきたのが城野憲子さん。神埼町に勤めて三十年のベテラン保健婦さんです。

神埼町では、昭和六十二年老人保健事業の基本健康診査に肝機能検査が加えられたことを機に、同検査を町の事業として継続して行ってきました。そして平成四年度、県のC型ウイルス抗体モデル検診を実施。しかしその後、住民から、何故このような検査をするのかという不安の声が発生しました。これではいけないと町内の医師らが集まって肝疾患対策委員会を設置し、平成五年から七年の三年間、正しい知識の普及啓発と健康相談の充実を目的に、夜な夜な町の事務職とで巡回健康教育に出向き、日常生活の注意を話して回りました。また、がんで亡くなった人の生前の生活調査や、町民の無作為アンケート生活実態調査を住民の協力のもと実施、調査結果分析は地元の医大に依頼し、その考察とアドバイスを盛り込んだ冊子を全戸配布しました。そのような事後指導が奏功し、平成七年を境に神埼町では肝疾患での死亡者数は激減します（グラフ参照）。その陰には、城野さんをはじめ保健婦スタッフ、町内の医師、町の事務職の人々のこうした地道な努力があったのでした。

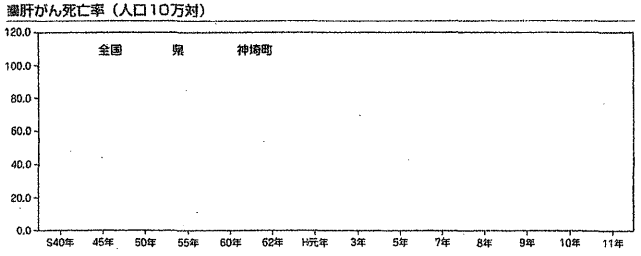
なぜ佐賀県に、なぜ神埼町に肝疾患が多いのか、原因は特定できてはいません。しかし、「原因を調査することは問題ではなく、大事なのはいま陽性の人をどうするかです。早く病状に気づいてもらい、治療に結びつけることが大切」と城野さんはいいます。

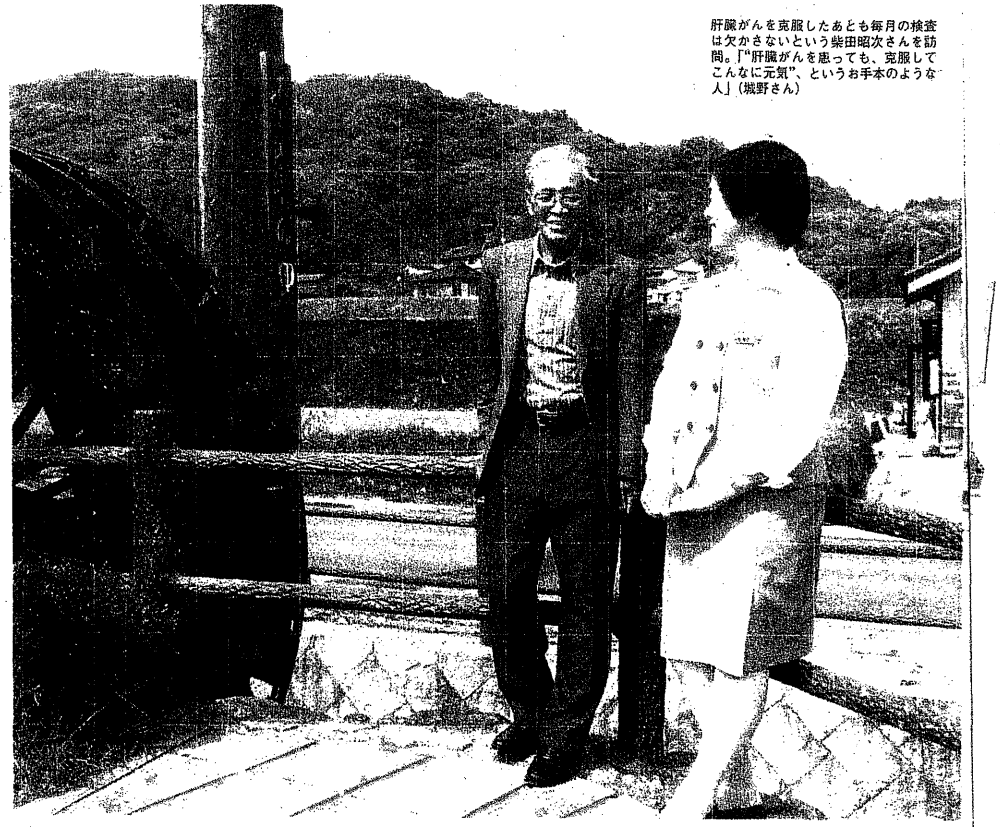
ならもと内科医院医師および町嘱託医の楢本純一氏。町の肝疾患対策委員長でもあり、公衆衛生的視点をもって町の医師会をひっぱる。楢本氏を先頭にした神埼町の医師会・医療のレベルアップが肝疾患の死亡率を下げた

神埼町保健センターのスタッフ。市町村保健センターには、自分たちで企画立案していける充実感があるという。城野さんについては「このまんまの人です（笑い）」「ニコニコしていていつも優しくて、しかも頼りがいのある上司。ただ健康教育の寸劇などで、お客（住民）が笑うまえに自分が笑ってしまうのが難点（笑い）」と同僚の保健婦

健康増進課長寿推進係のみなさん。介護保険、介護予防などで連携をとる

佐賀中部保健所にて、肝疾患対策会議。県保健所とは、事業の評価をしてもらったり今後の対策を相談したり、連携は密にとっている





肝臓がんを克服したあとも毎月の検査は欠かさないという柴田昭次さんを訪問。「"肝臓がんを患っても、克服してこんなに元気"、というお手本のような人」（城野さん）

田昭次さんは、肝臓がんを克服し元気で暮らす神埼町民の一人。ポイントは、がんの早期発見、早期治療でした。柴田さんは、かかりつけ医である、ならもと内科医院での血液検査で肝疾患を発見、平成六年に久留米大学病院に紹介され肝臓がんの手術をしました。

その後も再度がんが肝臓にみつかりましたが、それも早期だったため内視鏡手術で無事除去、いまも毎月の検査は欠かしたことがなく、城野さんの支援のもと生活習慣に気をつけて元気に生活しています。「いまどきがんといわれてもショックではない」というほど元気な柴田さんからは、早期発見、早期治療と生活習慣の事後指導の大切さがうかがえます。

巡回健康教育では、医師会と地域行政と保健婦の予防活動の三つが連携しうまく機能しました。そこには肝疾患対策委員長として町の医療従事者をひっぱってきた、町嘱託医の楢本純一医師の活躍も見逃せませんが、それら三者をつないでいったのは城野さんの手腕。城野さんのネットワークづくりの秘訣は、「私たちの仕事の一番の柱は住民サービスなのだから、住民の声をキャッチして、住民の視点に立って、住民のためになる施策をきちんと提言していくこと。そしてそれを外に向かって発信していくこと」。住民の声を聞く姿勢を常にみながもたないといけない、と城野さんはいいます。

年に数回、講師として出向く佐賀県立総合看護学院での講義風景。学院長の副田絳子さんは、城野さんについて「仕事の結果のまとめをきちんとする人。やっている…と